The King And I
組曲「王様と私」

Ted Rosenthal Trio
テッド・ローゼンタール・トリオ

1.君主と先生
My Lord And Master (6 : 07)

2. 踊りましょうか?
Shall We Dance? (6 : 02)

3. 夢を見た
I Have Dreamed (5 : 12)

4.楽しい口笛を吹こう
I Whistle A Happy Tune (6 : 54)

5.暗闇でのキス
We Kiss In A Shadow (5 : 51)

6.知り合うことは
Getting To Know You (4 : 33)

7.何か素晴らしいこと
Something Wonderful (6 : 27)

8.シャムの子供たちのマーチ
March Of The Siamese Chidren (4 : 52)

9.ハロー、若い恋人たち
Hello, Young Lovers (5 : 09)

all songs by R. Rodgers & O. Hammerstein II

テッド・ローゼンタール Ted Rosenthal《piano》
ジョージ・ムラツ George Mraz《bass》
ルイス・ナッシュ Lewis Nash《drums》

録音：2006年3月23日　ザ・スタジオ、ニューヨーク

℗© 2006 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

＊

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan
Recorded at The Studio in New York on March 23, 2006
Engineered by Katherine Miller
Mixed and Masterd by Venus Hyper Magnum Sound :
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Front Cover :©The Estate of Jeanloup Sieff / G. I. P.Tokyo.
Artist Photos by Mary Jane
Designed by Taz

■第2回モンク・コンペティションの優勝者、ヘレン・メリル(vo)の伴奏でおなじみのピアニストがついにヴィーナス・デビュー。

2006年6月に発売されたケン・ペプロフスキー(ts,cl)の新作『メモリーズ・オブ・ユー』(TKCV-35372)で、見事な伴奏を披露、その存在を知らしめたテッド・ローゼンタールが、ようやくヴィーナス・レコードから本格的に紹介されることとなった。これまでヘレン・メリル(vo)の伴奏者として何度も来日、リーダー作も内外のレーベルから9枚発表しているローゼンタールだが、なぜか日本では話題にならなかった感がある。このアルバム『王様と私』で、彼の才能に再び注目が集まるのは間違いない。

早速、今回の録音までの経緯をテッド本人に尋ねてみた。「昨年(2005年）の12月、ケン・ペプロフスキーの録音に参加した時、プロデューサーの原（哲夫）氏から、ピアノ・トリオでのレコーディングを依頼された」という。

今回のヴィーナス・デビューにあたり、ローゼンタールは2つのアイディアをプロデューサーに提案した。ひとつはリチャード・ロジャース＆オスカー・ハマースタイン2世によるミュージカル『王様と私』の作品集、もうひとつはヘレン・メリルの愛唱曲集だ。検討の結果、前者が第1弾として採用されたが、後者のアイディアも次回以降のリーダー作で採用されると思われる。

ところで、ミュージカル用に書かれた楽曲には、ジャズのスタンダードとなったものが無数にある。しかし、アルバム全体をひとつのミュージカルに限定したものとなると、そう多くはない。その理由を考えてみると、ミュージカル用の楽曲は、もともと舞台のある場面のために書かれたものであり、ジャズの即興演奏をするのにあまり向いていない（＝アドリブをやりにくい）からと思われる。

とはいえ、『王様と私』を取り上げたジャズ作品は過去にいくつかある。それらはいずれも1950年代後半に集中しており、ウィルバー・ハーデン(flh)のサヴォイ盤、ジェラルド・ウィギンス(p)のチャレンジ盤、マスターサウンズ（注：50年代西海岸で活躍したユニット。ウェス・モンゴメリーの兄弟バディとモンクが参加）のパシフィック・ジャズ盤など、だ。

テッドも本作に臨むにあたり、きっとそれらを参考、研究したのだろうと推測したが、本人に尋ねると、意外にもそのいずれも聴いたことがなかった。「ミュージカルの『王様と私』は、何度か舞台で見た。またこのなかで使われたいくつかの楽曲は、20代の頃から、さまざまなアルバムや生演奏を通して、ジャズのヴァージョンを聴いてきた。たとえば〈Shall We Dance〉はカサンドラ・ウィルソンの歌で、〈I Have Dreamed〉はフレッド・ハーシュ(p)の演奏で、といった具合に。〈Hello Young Lovers〉は、多くのジャズの名演がある。それらを参考しながら、今回のアルバムを作り上げた」

後述するが、ミュージカルの楽曲には、構成がジャズではおなじみの12小節単位のブルースや、いわゆるAABA32小節でないものが多い。なれないと、ソロのコーラス数を数えるだけでも大変だ。ジャズ・ヴァージョンを作るのに苦労しなかったのだろうか。「それほど苦労はしなかった。それぞれの形式で、即興演奏をどうやって組み立てていくか。それにについて考えることは、パズルを解くような楽しさがあり、私自身喜んでやっている作業なんだ」とテッドは語る。

共演者のリズム・セクションにテッドが選んだのは、ジョージ・ムラーツとルイス・ナッシュ。トミー・フラナガンや秋吉敏子、サイラス・チェスナットとのアルバムやツアーでおなじみの2人である。どちらも説明不要の名手だが、「ジョージとは日本ツアーで何度も演奏している。ほとんどがヘレン・メリルのバックだが。ルイスとはアメリカ本国で数回共演した程度だ。どちらもお気に入りのミュージシャンで、2人が組んだときのコンビネイションのよさは誰もが知っているはずだ。今回『王様と私』を取り上げるにあたって、これらの楽曲をよく知り、私の意図を深く理解してくれる最良のパートナーは、彼らしかないと思った」と説明している。

■ミュージカル『王様と私』

『王様と私』が1951年3月末に開幕したブロードウェイ・ミュージカルで、主演はユル・ブリナーとガートルード・ローレンスだ。この原作は、マーガレット・ランドンの小説『アナとシャム王』で、実在のイギリス人女性、アナ・レオノーウェンズの冒険に満ちた日記をもとに書かれたものである。

物語の舞台は1860年代初頭のシャム国（現在のタイ）のバンコク。主なあらすじは以下の通り。シャムの国王モンクートが養っている多くの子供たちの世話をするため、イギリスから家庭教師としてやってきたアナは、専制的で野蛮な側面もある国王と衝突を繰り返す。しかしアナと国王は、やがて心のどこかで惹かれるようになり、この国の民主化に向け、アナは国王に大きな影響を与えていく。

国王の死後も、王子チュラロンコーンが新たな国王となるが、その助言役として国に留まった。物語の途中、モンクートの妾のひとりタプティムと、その恋人ルンタとの隠れたロマンスが、悲劇的な伏線として描かれ、ジェローム・ロビンス振り付けによるバレエ「アンクル・トムの小さな家は、『アンクル・トムの小屋』に基づく劇中劇の形をとりながら、物語の展開と密接に結びついた重要性を持っている。

国王役はずっとブリナーがつとめ、1952年9月にローレンスが死去すると、アナ役はコンスタンス・カーペンター、アナマリー・ディッキー、パトリシア・モリソンが引き継き、1956年に映画化された時には、デボラ・カーが演じている。

■テッド・ローゼンタール紹介

先に述べたように、日本に何度も訪れて演奏しているテッド・ローゼンタールだが、本作で彼の名前をはじめて知った人もいるに違いない。一躍有名になったのは1988年、第2回セロニアス・モンク・コンペティション（ピアノ部門）で優勝したときだ。本名Teodore Marcus Rosenthal。1959年11月15日、ニューヨーク州グリンネック生まれの46歳。妹がアマチュアのバイオリン奏者。6歳から12歳までロックを演奏、その後ジャズに転向。12歳でトニー・アレス(p)に師事。ハイスクール時代にはクラシック音楽に興味を持った。その後マンハッタン音楽院で学び、マニー・アルバム、ボブ・ブルックマイヤー、メイヤー・カフペルマンにアレンジを師事。1988年からジェイ・レオンハート(b)と共演。1991年ジョー・ロッシアーノのビッグバンドに参加。1992年にはジョン・ファディス、ジェリー・マリガンと共演するとともに、自己のトリオやカルテットによる活動を開始。現在は演奏活動のほか、ジュリアードと母校マンハッタン音楽院で教鞭をとる。妻は弁護士で、プロのバイオリン奏者。敬愛するミュージシャンとして、アート・テイタム、バド・パウエル、ハービー・ハンコックの名前を挙げている。これまでケンミュージックやCTI、コンコード、プレイスケープなど複数のレーベルから9枚のリーダー作をリリース。自己のホームページ（http://www.tedrosenthal.com/）に詳しいディスコグラフィーを掲載している。

■演奏曲目解説

1.君主と先生(My Lord and Master)

基本はA1(16)B(12)A2(16)の44小節。エンディング部に8小節のタグがつく。ソロはピアノ1コーラス、ベースがA,Bの28小節のみで、ラスト・テーマはA3から。組曲の幕開けにふさわしく、軽やかで優雅な演奏。

2.踊りましょうか？(Shall We Dance?)

このミュージカルから生まれた最も有名なスタンダードだ。英国からやってきたエドワード大使の登場の場面や、フィナーレで家庭教師が国王にダンスを教える場面で流れる。人を愛することの大切さを教えるという歌だ。構成はA1(6)A2(6)A3(6)B1(8)B2(8)の34小節。ミディアム・テンポのスイング感が心地よく、1,2,3拍目にアクセントを置いたアレンジが小気味よい。ソロはピアノが2コーラス、ベースが1コーラス、ドラムとピアノのバース・チェンジで1コーラス。8小節のリフ（イントロも同じ）をファースト＆ラスト・テーマの最後、ピアノ・ソロの後、ドラムとのバース・チェンジの後に入れるという構成がトリッキーだ。シダー・ウォルトンやデヴィッド・ヘイゼルタインに通じるセンスのよさが感じられる。

3.夢を見た(I Have Dreamed)

オリジナル・ヴァージョンと趣向を変えて、テーマは軽いボサ・ノバ・タッチ。後半はスイング・テンポになる。A(8)B(8)C(8)D(12)の36小節。ファースト・テーマのメロディの後（ベース・ソロの前）にヴァースを弾いている。ソロはベース1コーラス、ピアノ2コーラス。ブロック・コードと軽やかな8分音符の使い方が印象的だ。

4.楽しい口笛を吹こう(I Whistle A Happy Tune)

オープニングの場面で、シャムに船で到着した家庭教師と子供が登場。「この歌を口笛を吹けば、勇気がわいてくる」という内容の歌。A1(10)A2(10)B(8)A3(10)の38小節、各ソロの前にバース（インタールード）部がある。演奏は最初ゆっくりとした電車のようなシャッフル・ビートのブルース・ピアノでスタート。最初はテーマの変奏で1コーラス、いきなりテンポをアップさせて2コーラス。ウォーキング・ベースのソロで1コーラス、そしてドラムとピアノのスリリングな8小節交換が聴かれる。テッドのテクニシャク、豊富なアイディアをうかがえるトラックだ。

5.暗闇でのキス(We Kiss In A Shadow)

タプティムとルンタの悲劇の恋を集まった場面で流される曲。歌詞は「人目を避けて出合って、また別れる」という内容。A1(8)A2(8)B(8)A3(12)の36小節。ソロはピアノ1コーラス、ベースが前半のみの半コーラス（素晴らしい！）、ラスト・テーマはB、A3の20小節のみ。テッドは最後のA3で鮮やかに転調をみせるなど、シングル・トーンの粒立ちのよさも印象的。完成度の高いバラードである。

6.知り合うことは(Getting to Know)

物語の序盤、英国出身の家庭教師が宮廷でシャム国王の子供たちに地理を教える場面で流れる。「知れば知るほど大好きになる。仲良くしましょう」という歌。A1(8)A2(8)A3(8)B(12)の36小節。スイング・テンポでイントロのリフはピアノとドラムの2小節交換で始まり、ファースト・テーマの後、ソロはピアノ（3コーラス）、ドラムとのバース・チェンジが2コーラス。ミュージシャン同士の一体感、ベースの牽引力、スイング感が素晴らしい。

7.何か素晴らしいこと(Something Wonderful)

国王に約束を反古にされた家庭教師は帰国を決意。しかし国王の妻のひとりティアン妃に留まるよう説得される場面で流れる美しいバラードである。A1(8)A2(8)B(8)A3(18)の42小節。ピアノ・ソロはA1,A2、続くBはピアノがテーマでベースが弓弾き、そのままベースがA3のみでラスト・テーマ。無駄のないリリシズムとアルペジオの使い方は、ビル・チャーラップの演奏に通じる。ちなみにテッドとビルは互いによき友人。過去にピアノ・デュオによるアルバムを出したり、最近もコンサートで共演している。夜明けの雰囲気をもった演奏だ。

8.シャムの子供たちのマーチ(The March of Siamese Children)

これはもともと序曲(Overture)の器楽曲として書かれたもので、歌詞はない。ここではドラム・ソロをフィーチャー。ドラムのイントロ4小節に続き、A1(16)B(8)A2(16)C1(16)C2(16）A3(16)の88小節という構成だが、その展開がトリッキーだ。A1,B,A2までがドラムのインタールード。その後ピアノ・ソロが1コーラス（ここだけ実にコンテンポラリーな感じ)。再びC2でドラムのインタールード。A3でピアノがラスト・テーマをとり、そのままフェイドアウトする。

9.ハロー、若い恋人たち(Hello,Young Lovers)

〈Shall We Dance？〉同様、ジャズのスタンダードとして有名な1曲。ティアン妃が宮廷内で独唱する。「若者の恋を応援します。昔の恋に酔いしれましょう」という内容の歌。演奏は意外にもマッコイ・タイナー、ハロルド・メイバーン、ジョン・ヒックスのスタイルを踏襲している。楽曲はA1(16)A2(16)B(16)A3(24)の計72小節。ワルツで演奏されるが、Bの16小節のみ4ビートのテンポに。最初のテーマに続き、ソロはマッコイ風に1コーラス、その後ドラムとピアノでA1,A2を8小節交換。Bは4ビートでピアノが取り、ラスト・テーマはA3のみ。

テッド本人によると、2007年6月から7月にかけて、自己のトリオによる来日が予定されている。詳細は不明だが、今後本作をきっかけに、彼の才能に注目を集まることを期待したい。

[2006年7月　後藤　誠/Makoto Gotoh]